



Veritas No.15 Summer (2001.7.16)

目 次

<追悼 頼藤和寛先生>

書評『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』 -- 生野照子  
略歴・著作

<夏休みに読んで欲しい一冊・読みたい本>

浜下昌宏 平井雅子 石川康宏  
岩田泰夫 金沢謙太郎 津上智美

<研究室から>

A Glimpse of Life on Prince Edward Island, Canada  
-- Philip MacLellan

<2000年度教員著作物リスト>

マルコ・ポーロ賞受賞作『捨児たちのルネッサンス』  
私とイタリア、捨児たちとの出会い -- 高橋友子

## <追悼 頼藤和寛先生>

去る4月8日に人間科学部教授 頼藤和寛先生がご逝去されました。ご逝去直後に出版されました著作の書評を生野先生がお書きくださいました。頼藤先生のご冥福をお祈りいたします。

### 書評

頼藤和寛著 『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』 生野照子 人間科学科教授

思い出すのは、人間科学部研究科の入試の日。「最後まで担当できるかどうか。できれば採りますけど…」。ゼミ生を採るかどうかという際の、頼藤先生の言葉だった。私は一瞬、動転して先生の顔を見た。「先生、そんな心境で…毎日を？」とぶしつけに聞く私に、先生は穏やかに笑っておっしゃった。「いや、誰だってこうなれますよ。なれない人はそれまでにいろいろ問題をだすのであって、たいていの人は最後までやれるんですよ」。

先生のご逝去後、しばらくはこの本を手にとることができなかった。ご遺影の表情や、自作の写真集、机に置かれた解剖モデルの頭蓋骨などが頭の中で行き来して、少しは整理しないと冷静に読めない気がしたからだ。先生のメッセージを正確に受け取らねばという、緊張もあった。学生には勧めたが、私は読んだフリだけしていた。

しかし、読み出すとあれやこれやを忘れて、ただ内容に引き込まれていった。奥様のお話では、先生はこの本を一気に書かれ、ほとんど校正もなく、編集者はその完成度に驚いていたとのこと。なるほどと思える。死を前にした著者の、これほどまでに素直で率直な文章…それは先生の生き方そのものから発すればこそである。読んでみると、書面に先生のお顔が浮かんでくる。いたずら坊主のような、いつもの笑顔。声も聞こえてくる。バリトンの少しハスキーな声で、まるで朗読してもらっているような気持ちになる。それほど、先生の文章は自然で澄み切っている。持ち前のとぼけた表現に出会うたび、読み手は癒され、笑顔さえでるだろう。

先生はまさに医者だった、と思う。とびきり本物の医者だった。“わたしは認識の鬼でありたい”という言葉は、それを表現して余りある。自分の死と向かい合ったとき、何人の人がこのような言葉を生み出せるだろうか。冷静に、客観的に、あくまでも大仰でなく、先生は内部に住み着いたガンとやがて来る死とを、医者の視点から鋭く分析されている。

“死ぬのも一苦労である”と、さらっと書いてある。“たかがひと一人死ぬというだけのことなのだから、もっと流れを簡略化できないものか、と思う”と。そして、“永遠も一瞬もたいした違いではない世界”に、“ちょっとお先に失礼”するのだと。そして私たちに、“「なにもない」過去の百億年と「なにもない」未来の百億年に挟まれた一瞬”を、“うかうか生きるな”“だから死を忘れるな”と遺しておられる。

すごい本であり、すごい著者である。すごい人物を失ったと考えるより、すごい人物に巡り合うことができたのだと考えたい。頼藤先生、ありがとう！ “また出会える日”までお元気で…と、そんな言葉で旅のお見送りをしたい。

## 略歴

1947年大阪府に生まれる

1972年大阪大学医学部卒

2年間の外科系研修医を経て、大阪大学精神科に入局

大阪大学病院勤務などを経て1986年から大阪府中央児童相談所主幹

1997年から神戸女学院大学人間科学部教授

2001年4月8日逝去

## 著作

『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』(文春新書；164) 文芸春秋,2001

『人みな骨になるならば：虚無から始める人生論』 時事通信社, 2000

『正しく悩む：自分でできる心理療法』(ラッコブックス) 新潮社, 2000

『ココロとカラダを超えて：エロス 心 死 神秘(ちくま文庫)』 筑摩書房, 1999

『精神科医とは何者であるか』 PHP 研究所, 1999

『母のための人間学』 玉川大学出版部, 1998

『悪と魔の心理分析：満たされない心の深層を探る』 大和出版, 1998

『いい男、見つけた!：男性鑑定 50 のヒント』 金子書房, 1998

『いま「危ない家族」の問題 Q&A』(講談社+α文庫) 講談社, 1998

『こころが晴れる本：もっと気楽に生きるための心理学』 PHP 研究所, 1998

『「自分」取扱説明書』 金子書房, 1997

『賢い利己主義のすすめ：ポスト・モラリズム宣言』 人文書院, 1996

『こまった家族診ます』 日本評論社, 1996

『いま問いなおす登校拒否：これからの見方と対応』 人文書院, 1994

『心理学プラス1』 双葉社, 1996

『家族の問題 Q&A：悩み聞きます答えます』(シリーズ・暮らしの科学；2) ミネルヴァ書房,1993

『だれかがどうにか症候群：現代人を理解する新しい視点』 日本評論社, 1995

『日々の不安：その正体とつきあい方』 人文書院, 1992

『ホンネの育児論』 創元社, 1992

『相性：二者関係の性格学』 創元社, 1991

『不定愁訴を知る：子どもへの対処と指導のために』(学校保健臨床医学双書；2) 東山書房, 1988

『家族関係あらカルテ』 創元社, 1987

『自我の狂宴：エロス 心 死 神秘』 創元社, 1986

『人間関係ゲーム：タテマエとホンネの研究』 創元社, 1984

『性格をつかむ：幸福への処世学』 創元社, 1983

『夫婦：危機にみる夫と妻のきずな』 朱鷺書房, 1980

共著

『精神医学への招待』 南山堂, 1999

『心理療法：その有効性を検証する』 朱鷺書房, 1993

翻訳

『精神分析的な精神療法の原則：支持-表出法マニュアル』 レスター・ルポルスキー著 岩崎  
学術出版社, 1990

### <特集>夏休みに読んでほしい一冊・読みたい本

浜下昌宏 総合文化学科教授

・夏休みに読んで欲しい一冊

ドストエフスキ『カラマゾフの兄弟』 -- 808.8/KA1E/V.19-20

夏休みこそひたすら読めない長編を。近頃巷で目に余る浅薄な人間・人生理解は無知・無教養の証拠。せめてドストエフスキくらいは学生時代に、しかも長丁場の夏休みを利用して読んでおこう。『カラマゾフ』が長すぎると思ったら、『罪と罰』でもけっこう。私がヨーロッパ（アメリカ・中国・韓国ではどうかな？）で研究者仲間たちと友人関係になる共通言語は、思えばプラトンとドフトエフスキであった。

・読みたい本

Dabney Townsend, Hume's Aesthetic Theory (Routledge) -- 118/TO2A

あえて専門研究の一冊を選ぶ。著者については、以前 Shaftesbury の<disinterestedness>概念について調べたときに、最もすぐれた解釈を出していると感心した研究者。その方と、3年前のリュブリアナ(スロベニア)の学会で偶然知り合いになり、その後論文などの交換をした。私の18世紀イギリス美学研究の今年のテーマをヒュームの趣味論にするつもりで文献検索したら、彼が上記の本を出したばかりであることを知り、さっそく注文する。この夏に読んでみなくては。巻末の参考文献に私が本学研究所の紀要に書いた英語論文も挙げてあり、恐縮。

平井雅子 英文学科教授

・夏休みに読んで欲しい一冊

尾川正二『極限のなかの人間・「死の島」ニューギニア』(光人社 NF 文庫) -- 080/T11/V.282

もとは筑摩叢書に入っていたこの本を、絶版になっているがすばらしいと友人に勧められ、神戸女学院大学図書館で見つけて「おっ、さすが!」と、思ったものです。去年、それが別の出版社の文庫として再出版されました。筑摩叢書版の扉には英国の画家ウオッツの「希望」という絵が載っています。「望みえないのになお望みつつ」目隠しをされながら何かにじっと 耳を傾けるようにして、手にもつ無絃の琴をつまびく天使の絵です。

その本に描かれる戦争という深刻な事態、しかもニューギニア全体で 23 万人もの将兵が死に、そのほとんどが飢餓とマラリアによる死であったという悲惨さにも拘わらず、読んでいて 心を打たれるのは 261 分の 1 の生存者である著者の不屈のユーモア、および彼と出会い、また永遠に別れて行った兵士たちの純粋な明るさ、最期まで思いやりと毅然たる生き方を示す人間の 品性、そして彼ら以上に純粋な現地の部族民たちの澄みきった心と眼差し、飢えと病と闘いつつ進軍する日本兵を人間として友として信頼し助けようとする彼らの徹底した善意、さらに 彼らを取り囲む色鮮やかな熱帯の自然の美しさです。

「どん底に見た裸の人間—それは人間の脆さであり、人間不信ともいうべき否定的なものだった。…人間が人間であるということには、学校教育も社会的地位も何のかかわりもない。…究極のものは…より本源的なもののように思われた。それを” 繊細の精神” と呼ぶならば、それは一体どこで養われてゆくものなのか。社会的に信頼されるべき人、あるいはインテリ という階層に属する人々が、借り着を脱ぐように空しく崩れ、教育もろくに受けていない人物のなかにも、素朴な、それゆえに真正な人間の輝きをみる、という事実をどう解釈すれば いいのだろうか。…極限の場に投げ出されながら、なおとっさに本来のみずからを選びとる確かさは、何によって培われたものなのか。」

「かれは生き、かれは目覚める—死んだのは死であって、かれではない。」(シェリー)

石川康宏 総合文化学科助教授

・夏休みに読んでほしい一冊

斎藤貴男『機会不平等』（文藝春秋） -- 発注中

「日本社会の低迷と閉塞は効率性の低下による」「効率の回復には競争が必要で、競争の喚起には規制緩和が一番だ」「競争を阻害するすべての規制を緩和（撤廃）しよう」。新自由主義とか新保守主義などと呼ばれるこうした政策思想が流行りです。しかし競争は必然的に敗者を生む。その敗者の実情がすでに「耐えうる常識の範囲」をこえていると著者は訴えます。「第2章・派遣OLはなぜセクハラを我慢するか」の現実「終章・優生学の復権と機会不平等」とともに大きな驚きでした。読みやすい一冊です。

・読みたい本

瀬地山角『東アジアの家父長制--ジェンダーの比較社会学』（勁草書房） -- 発注中

夏休みにはジェンダー研究会の原稿を書かねばならない。そのために従来の「企業の中の女性」という殻を破り、「家庭の女性」「社会の女性」へと自分の視野を広げるつもり。そのとっかかりとして「家族史」研究の成果を学びたいと思っている。真栄平先生や高橋友子先生にもいくつか教えてもらい、手元の文献だけは増えている。これはその山から無造作につかみ出した一冊。もちろん面白そうだと思う「期待感」がこれをつかみ出させたのだが。この夏のワルモノはジェンダーにはまる……予定。

岩田泰夫 総合文化学科教授

・夏休みに読んでほしい本

[社会福祉にかかわる体験記]

社会福祉学は、社会を舞台に生きる人々の生活に焦点を当てている。

ここでは、社会を舞台にして生きる人々の体験記をあらわした著書を紹介する。病気や障害などをもちつつ生きる人々やその家族、また、その人々にかかわる専門職などの「体験記」を中心に紹介する。

私たちは、まず、病気や障害などをもちつつ生きる人々の生命を削りながら書き綴った生命と生活の「こえ」を聴くことから学びの出発としたい。そして、それらを踏まえながら、またそれとともに、私のホットな心を育て、「私なりの社会福祉学」を確立していただきたい。

[1]病気や障害などをもちつつ生きる人々や家族の「体験」記

斎藤学編『カナリアの歌』（女性文庫）摂食障害 -- 617.8/SA8C

水上勉『生きる日々』（ぶどう社） -- 854.3/MI5

小林哲夫『松村春繁』（アルコール問題全国市民協会）アルコール依存症 -- 920.9/MA2

江畑敬介訳『わが魂にあうまで』（星和書店）精神障害 -- 617.8/BE7

[2]専門職の「体験記」など

E. キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』（読売新聞） -- 137.4/KU2/V.1

久保絃章『自立のための援助論』（川島書店） -- 362/KU3

金沢謙太郎 人間科学科専任講師

・夏休みに読んで欲しい一冊

石弘之他編『必読！環境本100』（平凡社） -- 628/IS4A

編著者として私もかかわっている一冊で恐縮ですが、内容はタイトル通り、環境関連の基本書ガイドです。ここ10年以内に出された本をとり上げ、各書誌情報、概要、目次などを見開き2ページで紹介しています。主に大学院生が執筆しているため、わかりやすい文章になっています。100冊の中から、どれをどういう順番で読むのかについては、あなたにおまかせします。

・読みたい本

松田裕之『環境生態学序説』（共立出版） -- 570/MA10

著者の研究理念は、「社会的に役に立つ研究、視野の広い研究をめざす。基礎科学は意外性を求め、応用科学は常識を重んじる。聴衆を煙に巻く講演ではなく、目から鱗を落とす話を、カタカナより大和ことばを。」と独特です。人間と自然の「共生」関係をめざすというのは欺瞞で、今の世代で使い尽くさず、自然の恵みを末永く受け続けるような「持続可能な寄生関係」をめざすべきだという本書は要チェックです。

津上智実 音楽学科教授

・夏休みに読んで欲しい一冊

服部幸三『西洋音楽史 バロック』（音楽之友社） -- 780.9/ON1/V.2

バロック音楽とは何か、その本質と具体的な顕われとを、実作品に則しながら論じた見事な音楽書。がっしりとした理論的な枠組みの中で、個々の作品に注がれる視線は細やかかつ透徹したもので、筆者がいかにかこれらの音楽を愛しているかがまざまざと感じられる。音楽史の本でありながら読んで感動するという稀有の体験ができる。バッハを弾く前にぜひ一度読んでほしい。

阿部純子『ヨコハマの女性宣教師』（EXP） -- 発注中

1871 年に来日して、横浜山手にアメリカン・ミッション・ホーム(横浜共立学園の前身)を開設したメアリー・プラインの書簡を中心とした書。明治初期における女子教育の始まりがどのような状況下で始動したのか、当時の日本が一宣教師の目にどのように映ったのかがよく分かって興味深い。神戸の女性宣教師たちについても、このように読みやすい形で書かれた本はないものだろうか。ご存知の方は教えて下さい。

アラン・バートン＝ジョーンズ『知識資本主義』（日本経済新聞社） -- 発注中

現在はグローバリゼーションの時代などと言われるが、ポスト工業化時代（財に代わってサービスが重要となる社会）が進むにつれて、経済の基盤が実物資源（石油や原材料）から知識へと移行し、かつての産業革命に匹敵する知識革命が起こりつつあるという認識の書。経済のあり方や知識の役割が変われば、仕事のあり方や学習の仕方も大きく変わっていくはず。就職を考えている人にはもちろん、これからの時代を生きていくことを考えようとする人に読んでみてほしい。

・読みたい本

ゲオルギアーデス『シューベルト 音楽と抒情詩』（音楽之友社） -- 780.92/SC3S

ドイツの音楽学者ゲオルギアーデス（1907-1977）の主著 Schubert, Musik und Lyrik（1967）がついに完訳された。ゲオルギアーデスの著作は、ずっと昔に『音楽と言語 ーミサの作曲に示される西洋音楽の歩み』を読んで深い感銘を受けたので、ぜひ読みたいと思っている。500 頁余りのこの大著を私の夏休みの宿題にしよう。

なお、『音楽と言語』は歌を歌う人には必読の書。現在、講談社学術文庫に入っていて手軽に読める。



## <研究室から>

A Glimpse of Life on Prince Edward Island, Canada

Philip MacLellan 英文学科専任講師

Early on a mid-winter morning as my boots crunch over the crisp dry snow, I notice a young Japanese woman across the street tugging on her scarf to protect herself from the bitter cold. Few tourists stay to brave this side of Prince Edward Island, with most favoring the warm and vibrant summer months of beaches, clam digging, deep sea fishing, lobster suppers, craft shows, golf and musical theatre at the Confederation Centre. In a place where 95% of the population trace their origins to Britain or France, this visitor “from away” stands out. Her courage brings a smile to my face.

While few Japanese visit during the winter months, Japan now provides the largest international group of tourists to this small province on the east coast of Canada. Why are Japanese attracted to Prince Edward Island? I first asked myself this question in the summer of 1986 when Mami came to stay with my family. This was my first contact with Japan, and at that time I could not understand how someone from half a world away would make the effort to visit “PEI,” as we “Islanders” call it, when few Canadians bother to make the trip.

The obvious answer, of course, is Anne of Green Gables, the famous character in the novel written by Lucy Maud Montgomery in 1908. But what is the attraction to Anne? Anne says and does the things that young Japanese women wish they could but cannot. She stands up for what she believes, speaking first and worrying about the consequences later. This is the answer given to me by Mami. Anne, who is largely an autobiographical portrait of the author Montgomery herself, does not fit easily into the strict confines of early 1900s Island society. But she refuses to let the constraints of society’s expectations hold her back. Adopted mistakenly by an elderly brother and sister who had hoped to receive a boy to help them on the farm, her energy, honesty and creative wit quickly win over Matthew and Marilla, and they just cannot bear to send her back to the orphanage. Other, less liberal-minded people do not appreciate Anne so well. She causes ripples throughout Avonlea society when, in an era when alcohol was strictly prohibited, she accidentally gets tipsy drinking too much raspberry cordial with her bosom buddy Diana. When classmate Gilbert cruelly teases Anne

about her orange braided hair, calling them “carrots,” she hits him with her stone slate, breaking it over his head. Anne’s unorthodox ideas and refusal to remain silent turns Island life upside down, and some people do not take well to the change.

Visitors to Prince Edward Island today will find that society has changed much since the days in which Anne of Green Gables was written. Islanders are much more aware of the patterns of life beyond the small island, and society (thankfully!) is much freer than that described in Montgomery’s books. However, even in this modern global era, large traces of its rural roots remain, and as you relax by the Lake of Shining Waters or walk through the Green Gables house in Cavendish, you may just find yourself swept back to the days of Lucy Maud Montgomery and Anne.

#### 2000 年度教員著作物リスト

難波江和英、内田樹共著 『現代思想のパフォーマンス』(松柏社、2000.4) -- 190/NA1

高橋友子著 『捨児たちのルネッサンス』(名古屋大学出版会、2000.4) -- 945/TA4

平井雅子、難波江和英、石川康宏、真栄平房昭、溝口薫、上西妙子他著

『共同講座 20 世紀のパラダイム・シフト』(国書刊行会、2000.4) -- 045/HI3

山祐嗣訳 『合理性と推理』(ナカニシヤ出版、2000.4) -- 131.6/EV1

内田樹訳 『レヴィナス序説』(国文社、2000.9) -- 194.9/LE5B

川合真一郎他編著 『水産環境における内分泌攪乱物質』(恒星社厚生閣、2000.10) -- 638/NI1A/V.126

森永康子著 『女性の就労行動と仕事に関する価値観』(風間書房、2000.12) -- 339.4/MO2

松田央著 『キリスト論』(キリスト教歴史双書 18)(南窓社、2000.12) -- 220.9/NA2/V.18

清水忠重著 『アメリカの黒人奴隷制論』(木鐸社、2001.2) -- 323/SI19

内田樹著 『ためらいの倫理学』(冬弓社、2001.3) -- 140.4/UT1

タイトルページにお名前の掲っているもののみ掲載いたしました。ご了承下さい。

2001 年度 マルコ・ポーロ賞受賞 『捨児たちのルネッサンス』

私とイタリア、捨児との出会い 高橋友子 総合文化学科助教授

私がイタリアに 関心を抱くようになったのは、中学 1 年生の時に、イタリア国营放送 RAI が製作した「レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯」というテレビドラマを、NHK で見たのがきっかけでした。当時我が家にはまだ白黒テレビしかありませんでしたが、そこに映し出されたレオナルドの多才な個性とともに、中世のフィレンツェの街並みや トスカーナ地方の美しい田園風景に強烈な印象を受けました。それは、京都西陣の狭い下町で生まれ育った私には、まったく別の世界でした（実は京都とフィレンツェは、古い歴史をもつがゆえに住民の気位が高く、外から来る人に対して閉鎖的で猜疑心が強いという共通性があることを、留学してから知りました）。そこで、イタリア・ルネッサンス関係の本を片っ端から読むようになりました。高校生のころはすでにイタリアにはまっていて、『神曲』や『デカメロン』を読んで、空想にふけて楽しんで いました。イタリア映画もよく見ましたね。それで、大学進学の際にイタリアの文学か歴史のどちらに進むか迷いましたが、結局ルネッサンスの時代の歴史的背景を 学びたいと思って、西洋史専攻のコースを選びました。

捨児を研究テーマに選んだのは、拙著『捨児たちのルネッサンス』の「あとがき」にも書きましたが、ルネッサンス研究というと美術や文学、思想といった「エリートの文化」についての研究が主流で、同じ時代に生きていた一般庶民に研究者の目が向けられることが少なかったからです。今回の受賞で特にこの点を 評価いただけたことは、喜ばしいです。そして大学院生のとき、アメリカ人研究者が書いた 15 世紀のフィレンツェの捨児に関する論文を読んで触発され、その後留学する機会を得ましたので、フィレンツェに滞在し、捨児養育院の文書をじかに手に取って読むことができました。感激しましたね。でも、それが今回の ような研究書になるまでには、10 年以上もの時間がかかりました。

留学時代は、異文化の生活に慣れるまでは大変でしたが、慣れてからはたいへん楽しかったです。というより、つらかったことも今では微笑ましく思い出されます。 あのところ知り合ったイタリアの友人たちは、私にとっては大切な精神的財産です。学生のみなさんの中にも、これから留学される方がたくさんおられると思いますが、異文化の環境にあって失敗はつきもの。失敗を恐れず困難を克服して、より大きな世界と自分を発見してほしいですね。